

優秀賞

命草（いのちぐさ）

お茶の水女子大学附属中学校 3年 大西 杜有子

葉っぱの上ののでんでん虫は、通った後ろに道ができる。この世には、あつという間に消えてゆく道、後世に残る道など、図式化できない程の無数の道が、無限に広がっている。

私が生まれて初めて口にした言葉は、「ママ」でもなく、「パパ」でもなく、「葉っぱ」だった。生後八ヶ月の私は、散歩に出かける度に樹木や草を指さして、「葉っぱ！」と、声を上げて、喜んでいたそう。

幼稚園に入ると、不思議な葉っぱの絵ばかり描いていたらしい。その葉っぱはツル状になっているが、ジャックと豆の木のように、上へ上へと伸びていくのではなく、地面の下へもぐり、やがて根っこに結合して、ひとつの苗の中で養分がグルグルと循環するような構造になっている。両親が、

「この絵は、何の植物なの？」
と聞くと、幼い私は、

「この草は栄養がグルグル回っているから死なないの。どんな病気も治す薬の葉っぱなの。」

と、言いながら、その栽培方法や畑の様子まで、何時間も飽きずに話していたそう。両親はこの葉っぱを「命草（いのちぐさ）」と名付けて、私が延々と楽しそうに話すビデオ録画と共に、一〇〇枚以上もある命草の絵を、今でも大切に保管してくれている。

小学校時代に、植物博士と呼ばれた私は、目に見えない微生物という生き物の存在を知り、夢中で顕微鏡をのぞく日々を送っていた。そして中学生の今、学校の自主研究でも、生態系と環境問題について調べている。

のでんでん虫と私。まだ少ししか進んでいないけれど、振り返ると、私達らしい道が出来ている。のでんでん虫のように、すべての道はいずれ消えてしまうものかもしれない。微生物が生きた道なんて、ほとんど誰も知らない。でも、それぞれの道には、ちゃんと目的があつて、数えきれない生き物たちの道が繋がっている。地球が作られているのだ。

私の道は、まっすぐに「命草」へ、向かっている。